

『診切枢要』の脈法

中川 俊之

日本鍼灸研究会

『診切枢要』は、曲直瀬道三が永禄九年（1566）に著した漢文体の脈書で、全28葉（目録1様、序2様、本文25様）からなる。訓点と片仮名が附されている。本発表では、曲直瀬道三の脈法研究の一環として、『診切枢要』の脈状と脈診法の検討を行う。テキストは曲直瀬正琳写本（東大顎軒・A00-6488）を用いた。

【道三の脈書】 道三の著作のうち、脈診を中心に著述されたものには、『診切枢要』のほか、『類證弁異全九集』（1544）巻之一、『脈論』（1571?）、『診脈口伝集』（1577）、『脈訳簡略』（刊年未詳）、『医家要語集』（1572）の察脈要語、『切紙』（1582成書）脈訣刊誤撮要の「診切・博約之次序」などがある。なかでも『診脈口伝集』の体例は『診切枢要』に近く、脈診の前提四脈、二十六脈状などを記載する点で内容が類似する。ただし、『診切枢要』が各条毎に引用医書を列記しているのに対し、『診脈口伝集』では初学向けの脈書として必ずしも引用医書を記さない点が相違する。

【内容】 『診切枢要』は脈診とそれに関わる要点を55条にわたって述べている。前段では脈診の基礎（男女、陰陽、神、榮衛、五蔵、経脈など）、中段では脈診部位や脈状（左右脈状、寸関尺、気口人迎、神門、七表八裏九道など）、後段では脈證（症状と脈状、婦人の脈状、死脈、26脈状）を述べる。診脈の部位は人迎、気口（左右の関前一分）と左右寸関尺、脈状は浮沈遅数と二十六脈状（七表八裏九道＋数脈、散脈）を基本とする。

【引用医書】 各条名の後に引用医書を記載して、『丹溪脈訣』『脈訣刊誤』『医学正伝』『玉機微義』『脈経』『外科精義』『此事難知』『丹溪心法』『医学小学』『明医雜著』『衛生宝鑑』『惠济方』『医家大法』を引用する。道三の奥書に「於丹溪脈訣上下卷中。集於治法」とある様に、『丹溪脈訣』を重視し、引用が最も多い。

【脈状】 ①浮沈遅数：本書の「診切博約」において先ず『三因極一病證方論』巻一・総論脈式を引き、「文藻雖雅。義理難尋。動靜之辭。有博有約。博則二十四字。不濫絲毫。約則浮沈遅数。総括綱紀。」と述べ、浮沈遅数を脈状の綱要と規定する。診断は浮沈遅数の有力無力を人迎と気口にて弁別し、風湿寒熱（外邪）、虚実冷燥（内邪）の各脈證を決定する。浮脈は「風」（有力）と「虚」（無力）、沈脈は「湿」、「気」（無力）と「実」、「積」（有力）、遅脈は「寒」（有力）と「冷」（無力）、数脈は「熱」（有力）と「燥」（無力）の病證を表す。この論説は、道三の『診脈口伝集』四脈力説、『医家要語集』四脈力弁、及び『切紙』脈訣刊誤撮要の「診切・博約之次序」にも同様の記載が有る。ただし、遅脈にして無力を『診脈口伝集』四脈力説は「熱」とし、数脈にして無力を『医家要語集』四脈力弁では「瘡」とする。

②七表八裏九道脈：本書の「七表病證」「八裏病證」「九道病證」に記載される七表八裏九道脈は、七表＝浮扎滑実弦緊洪也、八裏＝微沈緩瀯遲伏濡弱、九道＝細数動虚促結散革代で、『三因極一病證方論』と一致する。

③脈状（二十六脈状）：本書の「対体名状」には、二十六脈状の形状、及び気口と人迎の脈證が述べられている。この二十六脈状は『三因極一病證方論』巻一・脈偶名状の内容と一致するが、篇名下に「丹溪脈ノ下」と有り、『丹溪脈訣』からの引用となっている。『診脈口伝集』対脈ノ二十六状もほぼ同様の記載である。『切紙』にも同様の記載が見られるが、一部が節略されている。